

第6学年 社会科 学習指導案

1. 単元名『戦争から平和へ ～長岡空襲と焼け野原からの復興～』

(教科書：『小学社会 6 上』 p. 118～145／学習指導要領：内容（1）ケ）

2. 単元目標

長岡空襲や戦後の復興の取り組み、東京オリンピックの開催について調べることを通して、戦後の長岡、日本は復興して民主的な国家として出発したこと、国民生活が向上して国際社会の中での地位が向上してきたことを理解し、戦後の長岡や日本の復興に努力した当時の人々の願いや、今後の国際社会の中での日本の重要な役割に気づくことができる。

3. 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
戦争の経緯や様子、それが国内外の人々に及ぼした影響について関心を持ち、意欲的に調べ、考えようとしている。	戦争の経緯や戦後の平和で民主的な国づくりについて学習問題を見出して追究し、それがどのような背景のもとで何を意図して行われたのか考え、そのあらましを適切に表現している。	戦争の経緯や国内外に及ぼした影響、戦後の社会の変化について、戦争を体験された方から聞き取ったり、資料館、図書資料などを活用したりして具体的事実やエピソードを調べ、まとめている。	戦争の経緯と国内外の人々の暮らしに及ぼした影響、戦後の政治や社会の変化などについて理解し、それをふまえて、自分たちの生活の背景について理解している。

4. 指導にあたって

(1) 児童の実態

新潟県長岡市は、太平洋戦争末期の1945（昭和20）年8月1日に空襲を受け、1486人もの命が犠牲となった。子どもたちが住む千手地区も、ほとんどの家屋が燃え尽きた地域である。

単元の学習に入る前に、太平洋戦争についての理解を記述式アンケートによって調べたところ、空襲によって長岡が焼けたということを知っている子が全体の3分の2ほどいた。また、自分たちの校区も焼けたということを知っている子が数人いた。情報源を見ると、多くはテレビから得た知識だが、祖父母から聞いたことがあると答えた子もいた。これらのことから、多くの子どもが長岡と空襲についての関連を知っているということがわかった。一方、「長岡が燃えたらしい。」といった、自信がないような記述が多く見られ、また、どのくらいの人々が亡くなったか、長岡のどこが燃えたのか、というような具体的な内容は見られなかった。

こうした様子から、空襲によって長岡のほぼ全域が燃え、1400人を超える多くの人々が亡くなったこと、自分たちの住む校区も全域が燃え尽きたことなどの事実をよく知る子どもはほとんどいないことがわかる。また、復興に向けて立ち上がった長岡の人々がいたからこそ、今の長岡市がある

のだということも考えたことはないだろう。

つまり、子どもたちは、身近な地域が空襲によって大きな被害を受けたこと、その被害から人々が立ち上がり、復興を遂げたということをよく知らないというのが実態である。

(2) 教材について

本単元は、日華事変から終戦、復興の様子について調べることを通して、復興に取り組んだ当時の人々の願いや、今後の国際社会の中で近隣諸国の人々と共に暮らすことの大切さに気づき、戦争と平和に対する見方や考え方を深めることがねらいである。学習を進めるにあたり、長岡空襲と長岡の復興を中心的な教材とする。

長岡市は太平洋戦争末期の昭和 20 年 8 月 1 日に空襲を受け、1400 人以上の方が亡くなった。子どもたちが住む校区も、校舎をはじめ、ほとんどの家屋が燃え尽きた地域である。長岡空襲の被害を調べることによって、自分たちの身近な地域で起きた戦災に対して、その悲惨さに心の底から気づくことができるであろう。

そうした事実を理解したうえで、復興まつりや長岡まつり、花火などを教材として取り上げる。空襲の翌年、昭和 21 年 8 月 1 日に、長岡市では商工会議所会頭の駒形十吉氏が中心となり、「復興まつり」が行われた。昭和 22 年には花火大会も開かれ、復興まつりは昭和 26 年から「長岡まつり」と改められ、花火と共に今日まで続いている。

甚大な被害を受けた長岡で、たった数年のうちに、こうした取り組みが行われた背景を考えさせたい。そして、復興や平和を願う人々の思いが込められていること、その人々の思いや願いが今も続いていることに気づくことができるであろう。

自分の住む地域の復興の様子を捉えたあと、日本全体の復興の様子を調べる。長岡での学びを生かして、日本の復興に努力した人々の願いや今後の国際社会の中での日本の役割について、意欲的に考えることができるであろう。そして、こうした人々の思いや願いについての気づきを友達と練り上げる中で、今後も近隣の諸国と協力し合って暮らしていくことの大切さに気づき、自分はどう生きればよいのか、自分の生き方について考えることができるようにしたい。

このように、地域から学ぶことで、戦争と平和に対する見方や考えを練り上げることができる単元である。

(3) 指導上の工夫・留意点

①地域の歴史的事象を教材化する

長岡空襲と長岡の復興の様子について、写真や市の記録文書、地図、表などの資料や戦災資料館での見学、空襲を体験した方から話を聞く活動などから調べる。また、自分の住む地域の歴史的事象であり、子どもが自分の祖父母や親戚などから情報を集めてくることも可能である。

1 次では、長岡空襲の体験画から疑問を出し合い、学習計画を立てる。その後、戦災資料館を訪れたり、空襲を体験した方から話を聞いたりして、空襲の悲惨さやその後の生活のつらさに気づかせる。長岡空襲についての学習を進めるにつれ、子どもは空襲が起きた理由や時代背景、その後の様子などに関心をもつと考える。子どもの様子を見取りながら、教科書や資料集などを活用して、太平洋戦争の始まりからその後の推移、原爆投下、沖縄戦、終戦の流れをおさえる。

2次では、空襲後の復興の様子に子どもの意識を向かせる。まず、空襲後のバラックの生活や物不足を表す写真や資料を提示する。子どもたちは人々の苦しい生活の様子に気づくことができる。そうした時代背景をつかんだうえで、「復興まつり」のチラシを提示する。この「復興まつり」に込められた人々の思いを、新聞記事や主催者の言葉などから考えることを通して、自分たちの住む長岡の人々の復興への願いに気づかせる。

3次では、戦後の日本と世界との関係を調べる。自分の住む地域の復興の様子を捉えた後に日本全体の復興の様子を調べることで、長岡での学びを生かして、日本の復興に努力した人々の願いや今後の国際社会の中での日本の役割について、意欲的に考えることができるだろう。

なお、長岡の様子と日本全体の様子の学習をつなげるために、太平洋戦争前後の長岡と日本全体の動きとを地図や年表で視覚的に結びつけながら、学習を進める。

②考えを練り上げる

子どもたちが考えを交流し合う中で、自他の重なりやずれに気づき、自分の考えを広げたり深めたりするような「子どもが自分の考えを練り上げる姿」を目ざしたい。

そのために、座席表を使いながら、授業中や日頃の子どもの言動、ノートへの記述などのメモを蓄積し、それらをもとにした意図的な指名や問い返しを行う。また、板書によって子どもたちの発言をつなげたり分類したりする。子ども自身が自分の考えと友達の考えとを比較し、ずれや重なり気づきやすくなるような発問や板書を心掛けたい。

5. 単元の指導計画（総時数 18 時間）

時	ねらい	○学習活動 ・内容	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
① （つかむ）	長岡空襲や太平洋戦争について関心をもち、その被害の大きさや経緯について調べる意欲をもつ。	○長岡空襲の体験画を見て、気づいたことや疑問に思ったことを出し合う。 ・長岡も空襲にあったことを知っている。でも、学校周辺も空襲にあった？ わたしたちが住む千手地区も、空襲の被害にあったのだろうか。 ○長岡市の空襲被災状況図を見て、気づいたことや疑問に思ったことを出し合う。 ・やっぱり、千手地区も空襲にあった。 ・なぜ、長岡が空襲にあったの？ ○学習計画を立てる。 ・長岡空襲に至るまでの日本の動きを調べてから長岡空襲について調べよう。	◎信濃川の土手を逃げ惑う人々の様子を描いた絵 ◎長岡市の空襲被災状況図 ◇絵を見て、自分たちが住む校区も被災したのではないかという予想をもたせてから、被災状況図を提示し、実際に被害にあったことを確認する。 ◆長岡空襲や太平洋戦争について関心をもち、意欲的に調べようとしている。 （関・意・態／発言）

② ③ ④ (調べる)	日中戦争・太平洋戦争の始まりと拡大の様子について調べることを通して、戦争と長岡空襲とのつながりに気づく。	戦争と長岡空襲とのつながりを調べよう。 ○戦争の始まりと拡大の様子について資料をもとに調べる。 ・日本はアメリカだけではなく、多くの国と戦争をした。 ・戦争が進むにつれて、日本もさまざまな国の人々を苦しめた。 ・人々、子どもたちの暮らしにも戦争が大きく影響した。 ・敗戦が続いて日本各地が空襲を受けるようになり、8月1日に長岡も空襲を受けた。	◎「中国全土に広がる戦争」図 ◎年表 ◎「アジア・太平洋への戦争の広がり」図 ◎「ぜいたくはできないはずだ」写真 ◎「戦争と国民生活の変化」表 ◎「校門前の兵士に敬礼する小学生」写真 ◎「工場で働く女学生」写真 ◎「空襲を受けた主な都市」図 ◎「沖縄戦」写真 ◎「原子爆弾の被害を受けた広島」写真 ◇世界・日本・長岡の様子について年表にまとめ、それぞれの関係を理解させる。 ◆戦争の経緯や国内外に及ぼした影響について、資料から調べ、まとめている。 (技／ノート)
⑤ (つかむ)	長岡空襲の概略をつかみ、長岡空襲についての追究意欲を高めたり、見学の視点を決めたりする。	長岡空襲の被害を調べよう。 ○資料から長岡空襲の概略をつかむ。 ・大勢の人が亡くなったり、傷ついたり、家を焼かれたりした。 ・千手地区の人たちも、空襲の時、怖かっただろうな。恐ろしかっただろうな。 ・空襲を体験した人からお話を聞きたい。 ○戦災資料館への見学の視点を決める。 ・被害の様子をもっと知りたい。 ・焼夷弾とは、どんな爆弾なのか。	◎戦災資料館からの資料 ◎DVD (『昭和20年8月1日～語り継ぐ長岡空襲～』平成20年NST製作) ◇長岡戦災資料館に協力を依頼する。(導入の絵の借用、展示物の見学・解説、語り部の依頼) ◆長岡空襲についての関心を高め、意欲的に調べようとしている。 (関・意・態／発言)

⑥ ⑦ ⑧ ⑨ (調べる)	長岡戦災資料館の見学を通して、千手地区が受けた被害や悲惨さについての理解を深める。	戦災資料館を見学したり、空襲を体験した方からお話を聞いたりして、長岡空襲についてもっと調べよう。 ○長岡戦災資料館を見学する。 ・千手の町では、大勢の人が亡くなったり、学校やほとんどの家が焼かれたりした。僕の家の手回りも燃え尽きた。 ・小学生も亡くなった。苦しかっただろうな。無念だったろうな。 ・改めて空襲は恐ろしい。悲惨だ。	◎資料館の展示資料 ◎語り部の方の体験談（空襲体験・戦後の長岡の様子を聞く） ◎千手地区の当時の地図を配付し、展示資料をもとに被災した家屋に色を塗る。 ◆長岡空襲の被害の大きさや悲惨さを実感している。 (技／見学の様子・ノート)
⑩ (まとめる)	これまでの学習を振り返り、長岡空襲に対する自分の考えをまとめる。	長岡空襲についてわかったことや考えたことをまとめよう。 ○調べ学習を通して考えたことや疑問に思ったことをノートにまとめる。 ○考えたことを交流し、今後の学習計画を立てる。 ・長岡や他の多くの都市で多くの方が亡くなって、やっと終戦した。戦争はやはりひどいものだ。 ・何もかも失って、多くの人々は絶望したのではないか。その後、人々はどのように立ち直ったのだろうか。	◎各自の見学メモ ◎語り部の方の話の要約 ◆太平洋戦争の経緯や長岡空襲について学んだことを整理し、それをもとにして自分の考えをまとめている。 (思・判・表／発言・ノート)
⑪ (つかむ)	空襲後の長岡の人々の暮らしを表す写真や、語り部の方の話から、当時の人々の生活の様子をつかむ。	空襲のあと、長岡はどうなっていたのだろうか。 ○空襲1年後の写真や、当時の人々の暮らしがわかる資料を読み取る。 ・戦後もしばらくは、食べ物が足りなかった。苦しい日々だっただろうな。 ・建物がまだ少ないし、建っている家も粗末な感じがする。雨や雪が降ったら大変だっただろうな。 ○「復興まつり」の写真を見る。 ・生活が苦しいはずなのに、どうして祭りを行ったのだろうか？	◎空襲1年後の市街地の写真 ◎空襲後の暮らしについての自作資料（『長岡の空襲』より） ◎語り部の方の話の要約 ◎「復興まつり」の写真 ◇終戦直後の人々の苦しい生活の様子をつかませたうえで、「復興まつり」の写真を提示する。開催の理由に目を向けることで、当時の人々の思いや願いに関心をもたせたい。 ◆戦後の人々の苦しい暮らしについて読み取っている。 (技／発言・ノート)

⑫ ⑬ (調べる) 【本時】	「復興まつり」のチラシからわかることを出し合う中で、空襲に負けないで、明るく元気に進んでいこうという人々の願いに気づく。	復興まつりは、空襲1年後のまだ生活が苦しい長岡の人々にとって、どのようなものだったのだろうか。 ○まつりの内容をチラシから読み取る。 ・商工会議所の主催で、空襲1周年を記念し、昭和21年8月1日に行われた。 ・景品付きの大売り出しがあったり、夜店や盆踊りが開かれたりした。 ○主催者のあいさつから、人々の思いや願いについて話し合う。 ・参加した人もお店を出した人も、みんな元気を出し合おうとしたのだな。長岡の人々は、みんなで力を合わせてがんばって戦後を生きてきたのだな。 ・復興まつりはこの後、どうなったのか。	◎復興まつりのチラシ ◎当時の様子を伝える新聞記事（催し物・開会式の主催者あいさつ） ◇復興まつりのチラシから、まつりの内容を読み取る。当時の新聞記事とあわせて、人々の思いや願いに気づかせる。 ◆復興まつりへの人々の思いや願いについて考えている。 (思・判・表／授業の様子・ノート)
⑭ (調べる)	「復興まつり」が翌年も行われ、「長岡まつり」として現在も続いていることの意味を考えることを通して、復興に取り組んだ人々の思いや願いが現在も続いていることに気づく。	復興まつりは、この後、どうなったのだろうか。 ○「長岡まつり協議会」のウェブサイトを見る。 ・「復興まつり」が「長岡まつり」に名前を変えて、今も続いているんだね。 ・第2回の復興まつりから花火を打ち上げたなんて、びっくりした。 ○「まつり」が続いている意味について話し合う。 ・「空襲を忘れてはならない」という当時の人々の願いが現代に続いていてうれしい。 ・長岡の人たちの願いやがんばりを、これからも忘れてはいけない。 ・これまで、「きれいだな。」としか思っていなかったけど、花火が嫌だ、という方の気持ちもよくわかった。でも、私は花火が大好きだ。そうした思いをもつ人の気持ちも忘れないように、これからも見続けたい。	◎「長岡まつり協議会」のウェブサイト ◎長岡空襲を体験した方の長岡まつりに対する思い（峰村剛編著『長岡空襲 60人の証言』より） ◇「花火は美しい・楽しい」というイメージをもっている児童に対して、「花火は焼夷弾の落下音を思い出させるから恐ろしい」という、空襲を体験した人々の話を提示する。 ◆長岡の人々の復興に向けた願いについて考えている。 (思・判・表／発言・ノート)

⑮ (調べる)	日本国憲法の制定や、さまざまな改革を調べることを通して、戦後に目ざされた国づくりについて考える。	日本全体では、人々はどのような願いをもって復興に取り組んだのだろうか。 ○選挙権の拡大をはじめとする、さまざまな改革について調べる。 ・戦争の放棄や選挙権の保障など、平和な世の中をつくろうとしているのがわかる。 ・長岡の人々の願いと重なるな。	◎選挙権の拡大を示すグラフ ◎日本国憲法序文 ◎戦後のさまざまな改革 ◇日本国憲法については、三原則にしばって特徴をつかませる。 ◆戦後の日本の社会の変化について理解している。 (知・理／発言・ノート)
⑯ ⑰ (調べる)	国際連合への加入や東京オリンピックの開催について調べることを通して、日本が独立を回復し、国際社会に復帰したことに気づく。	日本と外国の関係はようになったのだろうか。 ○サンフランシスコ平和条約の内容や東京オリンピックの開会式の写真からわかることを話し合う。 ・戦後 20 年でオリンピックを開いたなんてすごい。日本がみんなで力を合わせて復興したのだな。 ・平和の大切さを感じたり、平和を守る気持ちをこめたりしていただろうな。 ・オリンピックを開けたということは、国際社会からも日本の復興が認められたということだ。 ・社会や人々の暮らしも大きく変わっただろうな。 ○工業生産額や 3 C (カラーテレビ、自動車、クーラー) 普及率の変化のグラフからわかることを話し合う。 ・日本は工業を中心に発展したのだな。 ・電気製品が普及して、人々の生活も豊かになったようだ。今の私たちの生活と同じようだ。	◎サンフランシスコ平和条約 ◎1964 年東京オリンピックの写真 ◎2020 年東京オリンピック招致プレゼンの映像 ◎工業生産額の変化のグラフ ◎3 C の普及率のグラフ ◇2020 年のオリンピック招致プレゼンから、オリンピック開催の意味を考える。東京オリンピックは、日本が戦災から復興したこと、産業が発展してきたことを世界が認めたから、という予想を立てさせる。教科書や資料集からそれを裏づける年表や資料を探し、考えを確かめる。 ◆戦後日本の独立や産業の発展によって、人々の生活が平和で豊かなものに変わったことがわかる。 (知・理／発言・ノート)

⑮ (まとめ)	近年の近隣諸国との関係について調べることを通して、これからの社会のあり方について考える。	平和な世の中を守っていくために、私たちはこれからどうすべきなのだろうか。 ○領土問題や基地問題などの新聞記事から、日本人としてのこれからの自分の生き方を考える。 ・日本はアジアの国々と古くから深い結びつきをもってきた。長岡空襲の悲惨さを忘れずに、これからもお互いになかよく発展していきたい。 ・長岡の人々の平和を願う気持ちが今の長岡をつくったと思う。これからは、私たちが平和を守っていかなければならない。 ・北方領土やアメリカ軍の基地問題など、いろいろな問題があるが、話し合いを重ねて平和的に解決していかなければならない。	◎領土問題やアメリカ軍の基地問題などに関する新聞記事 ◆戦争と平和について、学んだことを根拠にして自分の考えをもっている。 (思・判・表／発言・ノート)
------------	--	---	--

6. 本時の指導（第13時）

（1）本時のねらい

「復興まつり」のチラシや説明資料からわかることを出し合う中で、空襲1周年を記念して開かれたこと、多くの人々が協力して開いたこと、多くの人々が参加したことがわかり、空襲の犠牲者のためにも、団結して、明るく元気に復興していこうとした人々の願いに気づく。

（2）本時の展開

<本時まで>

終戦直後の住宅状況や食糧事情などを表す写真や資料から、当時の人々の苦しい生活の様子をつかんだ。その後、「復興まつり」の写真を提示した。1回目の復興まつりが終戦から1年後に行われたことについて、「空襲1年後、生きることのできる精一杯なほどつらい生活をしている長岡の人々が開いた復興まつりは、どのようなものだったのか。」と疑問をもち、その解決に向けて、チラシからわかることを読み取ったり考えたりしたことなどを、それぞれがノートに記述している状態である。

時配	○学習活動 T: 発問 C: 児童の反応	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
5	○チラシから読み取ったことを発表する。 T: 復興まつりは、どんなことをしたのかな。チラシから読み取ったことを発表してください。 C: 景品付きの大売り出しがあったり、夜店や盆踊りが開かれたりしました。 C: 商工会議所が主催となって、空襲から1年を記念して、昭和21年の8月1日から行われました。 C: 抽選は、はずれがないし、高価な景品もあるので、みんな、うれしかったと思います。	◎復興まつりのチラシ、当時の写真、新聞記事 ◇チラシから読み取ったことを、まつりの催し物に整理して板書する。
20	○復興まつりに対するそれぞれの見方や考えを出し合う。 T: 復興まつりでできたことが見えてきましたね。 復興まつりは、空襲1年後のまだ生活が苦しい長岡の人々にとって、どのようなものだったのだろうか。 C: 今の生活は苦しいけど、買い物や盆踊りなどで気持ちを明るくして立ち上がろう、というお祭りだと思うよ。 C: 暗い気持ちだけでは、前に進めない。みんなに元気を出してもらうためのお祭りだったのかもしれないね。 C: 景品が当たったら、きつとうれしいだろうな。みんなをうれしい気持ちにして空襲から立ち直れるように、このチラシを配ったのだと思うよ。	◎復興まつりの催し物が整理された板書 ◇発表の前に、自分の考えをノートに書かせる。前時の記述とあわせて子どもの思考を見取り、意図的に指名することで、考えをつなげたり深めたりする。 ◇復興まつりへの参加者の立場での話し合いが安定してきたら、主催者の立場からの資料を提示して、揺さぶりをかける。
15	○新たな資料によって考えを確かめたり広げたりして、復興まつりに込められた人々の思いや願いに気づく。 T: 復興まつりがどのようなものだったのか、見えてきましたね。次の資料で確かめたり、新しいことを見つけてみましょう。 (主催者のあいさつを資料として提示) C: 大勢の人が参加したんだな。参加したみんなで、空襲の暗い気持ちを吹き飛ばしたのだと思うよ。 C: 8月1日に復興まつりをしたのは、犠牲になった方を忘れずにがんばろうという願いも込められているはずだ。	◎駒形十吉(主催者代表)の復興まつり開会式でのあいさつ(長岡商工会議所『長岡産業経済発達史』から抜粋編集) ◇子どもの発言・つぶやきと事象とを線でつなぎ、つながりが見えるようにする。

5	○学習を振り返り，自分の考えをまとめる。 T：今日の学習を振り返り，学んだことと，考えたことをノートに書きましょう。 C：復興まつりは，亡くなった人のことを忘れずに，みんなで明るく，元気を出してがんばろうという前向きな気持ちが込められたお祭りなんだとわかった。 C：復興まつりは，亡くなった人のためにも，長岡の人みんなで，団結してがんばろうという気持ちが込められたお祭りなんだと思った。復興まつりはこの後，どうなったのだろうか。 C：復興まつりは，参加した人もお店を出した人もみんな元気を出し合うためのお祭りだった。長岡の人々は，みんなで力を合わせて，がんばって戦後を生きてきたのだと思う。	◇「長岡の人々にとって復興まつりは…」の書き出しで自分の考えを書かせる。「復興まつりはこの後どうなるのだろうか。」という疑問があれば紹介し，次時に調べる問題とすることを提案する。 ◆復興まつりへの人々の思いや願いについて考えている。 (思・判・表／授業の様子・ノート)
---	--	--

7. 備考

根拠がはっきりできずに，自分の考えにこだわりをもてなかったA児が，本単元のまとめで「戦争では死者がたくさんでる。こんな悪い戦争は，一生，してはいけない。また，長岡花火は，楽しむだけではなく，復興や亡くなった人のことを慰める気持ちでも見たい。」とノートに記述した。A児の決意と捉えたい。また，物事を冷めたように捉えることの多いB児は，「空襲の事実や当時の人々の苦しみ，また苦しみの中から復興に取り組んだ人々は，私たちと同じ長岡市民だった，ということを私も忘れてはいけない。」と記述した。空襲と復興という事象を自分に引き寄せて捉え，考えた様子が読み取れる。

これらは，長岡空襲，千手地区の被害，復興まつり，花火など，地域から学んだことによる成果であると考ええる。地域から学ぶことで切実感をもたせ，子どもの戦争と平和についての見方や考え方を深めたり，広げたりすることができたと考える。